

オーストラリアで就労の日本人看護師と看護学生の オンライン交流の効果と課題

Effects and Challenges of Online Networking between Japanese Nurses Working in Australia and Nursing Students

看護学科 壬生寿子 日當ひとみ

I. はじめに

国内外で、さまざまな情報が行き交うグローバル化を背景に、看護職にも広い視野で物事を考える能力が求められている。これからの社会において、看護を必要としている人々の存在を認識し、日本だけではなく海外にも目を向け、グローバルな視点で実践につなげられるための国際看護の知識を身につけることが重要である。また、看護教育において、国際感覚を身につけるための国際看護学の科目を導入している大学や演習の科目に海外研修を実施している大学も増えている。本学においても4年次に「国際看護活動論」の科目配当や海外研修の企画をし、国際感覚を養う教育を実施している。また、国内においてもさまざまな海外研修が企画され、その中でも、オーストラリアは多民族国家であり、教育体制も整い、大学は留学生の比率が非常に高い状況である。さらに、世界でも有数の医療福祉先進国といわれ、看護教育も充実し、患者の権利、プライバシーについて、道徳的・人道的観点にもとづく徹底した教育がされている。オーストラリアへの海外研修の報告によると、海外研修は学生の多文化理解や国際看護の学びにとどまらず、学生たちの視野を広げ、潜在的な自己能力を再発見し、今までの自己を深く振り返り、未経験のことへの挑戦する機会となり、学生にとって、一人の人間としての成長、そして看護職としてのキャリア開発へとつながる体験となっていることがわかった(張 2015)とある。

しかし、COVID-19の影響や社会情勢の影響により海外研修への取り組みは、経済的状況などからも実現できない状況が現状である。そこで、異文化圏における看護体験を直接的に聴取、意見交換をすることで、より現実的な異文化理解や国際看護について把握することができると考え、オーストラリアの医療機関で就労の日本人看護師と本学看護学生とのオンライン交流(以後本文中を交流とする)を試みた。オーストラリアで就労の日本人看護師から医療・看護の現状を知ることにより、国際看護に対する意識の変化やオンライン交流の効果을明らかにするとともに、看護をグローバルな視点から概観することで、今後、海外での活動を目指す学生に対して、国際的感覚を養うための国際看護に関する教育に役立つ資料とすることを目的とする。

II. 研究方法

1. 研究対象及びデータ収集方法

- 1) 研究対象は本学2年次在籍の63名に研究の趣旨や研究方法を説明し、「同意書」の提出が得られ、ワークシートを提出した学生62名(交流後欠席の1名を除く)とする。
- 2) 交流時に記載するワークシートを準備し、記載内容は ①交流前後の国際看護への関心の「有」「無」と「その理由」 ②日本人看護師への質問内容 ③交流全体を通しての「感想」を

自由記述とした。ワークシートの①交流前の国際看護への関心の「有」「無」と「その理由」と②日本人看護師への質問内容については交流開催 1 週間前に記載させた。また、①オンライン交流後の国際看護への関心の「有」「無」とその理由 ③交流を通しての「感想」は交流終了後に記載させた。所要時間は交流を約 1 時間、記録時間を 30 分とした。

3) 「国際看護」の用語の定義

本研究における「国際看護」とは日本と異なる国での、その国の社会、教育、文化的背景、保健医療システム、労働環境、就労に関する側面などの看護分野に影響を与えるあらゆるものを考慮して適用する看護のこととする。

2. 分析方法

記載内容分析の手法を用いて分析した。①交流前後の国際看護への関心の「有」「無」については 2 択法で、単純集計で変化数を比較 (表 1)、「その理由」については類似した記述内容の類似性に従い分類した。(表 2・表 3) ②日本人看護師への質問内容をカテゴリー化 (表 4) ③「感想」の自由記述の分析については、記述内容は一文一義であるように区切り、一文章を一記述単位とした。記録単位を意味内容の類似性に従いカテゴリーに分類 (表 5・表 6)、カテゴリーを【 】、記述内容を『 』、生データを《 》で表記する。

ワークシートの記述内容は研究者が精読し、分析を行った。

3. 倫理的配慮

研究の目的・方法について、口頭および文書で説明をし「同意書」の提出を依頼した。ワークシートは研究以外には使用しないこと、参加同意の自由、拒否時も個人への教育や成績に不利益がおよぶ危険性がないこと、人権は守られることを最大限に配慮し、研究途中で研究参加の拒否の申し立てのあった場合は、学生個人とワークシートの確認を行い、その場でワークシートをシュレッターで廃棄し、研究対象から除外することを説明した。また、「同意書」の提出が得られたワークシートをコピーし、個人名は削除したワークシートを使用することを説明した。提出されたワークシートは研究者の研究室の鍵のかかるロッカーに保管し、研究終了後は速やかにシュレッターで廃棄し、電子媒体については再生不可能な状態にして廃棄する。また、オンライン交流の日本人看護師についての個人情報とは当該交流時のみに留め、交流中の写真撮影、録音は禁止とすること説明をした。開示すべき COI は無い。本研究は、八戸学院大学・八戸学院短期大学部研究倫理委員会の承認を得て実施した。(受付番号 23-19)。

4. オンライン交流の実際

1) 講師のプロフィール

A 氏・女性・40 歳代・既婚・子ども 4 人。高校卒業後、以前から国際看護に興味があったため、将来、看護師として海外で働きたいと思い、医療系大学の看護学部に入學した。卒業後、オーストラリアで看護師として就労を希望したが語学力資格基準に達していなかったため、語学力向上のために 1 年間語学留学をした。その後、看護師資格取得を目指し、現地の大学に 2 年次編入し、看護師資格取得後、臨地実習をした病院へ入職した。滞在していた州の看護師資格取得と同時に永住権を取得した。(2011 年に州それぞれの登録制度が統一され国家の免許更新制度となっている) 2020 年整形外科認定看護師の資格を取得し、2022 年主任看護師に昇任し、入職 16 年目である。看護学生指導、新人看護師教育業務も行っている。

2) 講話内容

① オーストラリアで就労の動機

中学・高校時代から海外に興味を持ち、高校での海外研修（アメリカ）や国際交流のプログラムやボランティア活動に参加していた。英語はもともと好きで、日常的に洋楽を聴き、英語のドラマや映画を好んで観ていた。高校時代「英検準1級」を取得した。

在学していた大学がオーストラリアの大学と提携をし、海外研修プログラムがあったため、在学中の2年次に約3週間ホームステイをしながら、研修を受けた。研修中、日本の大学在学中の病院実習体験の中で、忙しそうに走り回りながら働く日本の看護現場と違う、患者と英語でゆっくり会話をしている雰囲気や医師と対等に仕事をしている看護師の様子に看護の魅力を感じ、大学卒業後はオーストラリアで看護師として働きたいと思った。

ホームステイ先でも多国籍の異文化に触れ、日本とは違うのんびりとした環境や暮らしの心地よさを感じ、看護師として働きながら暮らしたいと強く思った。



【 オンライン交流中の様子 】

② オーストラリアで就労してメリット・デメリットと感じていること

[メリット]と感じていることは、日本人はマナーが良く、思いやりやさしさの心があると評価されている。多国籍の患者と接する中で、言語の壁は感じるが患者に信頼されていることを感じながら、楽しく仕事ができている。また、オーストラリアは看護師免許取得のための日本のような看護師国家試験は無く、看護師免許更新制度であり、学生も実習時には登録が義務付けられている。そのため、オーストラリアの看護師は原則、学士号（Bachelor of Nursing）の取得者であり、責任感のある専門職種として社会的評価が高いとされている。医療処置など、日本よりも看護師のできる仕事範囲が広く、日本では医師のみができる仕事の一部が、オーストラリアでは看護師が行うことが認められているなど、医師も看護師の意見を尊重しながら仕事ができている。

日本での就労経験が無いいため、日本の看護との比較はできないが、責任の重さを強く感じるが、その分仕事へのやりがいを感じている。病院で主任看護師、看護師長への昇任公募があれば自分で申し込み、試験に合格すれば主任看護師、看護師長になることができる。勤務状況（日勤帯7:

00～15：00、原則 3 交代制) は時間外労働がほとんど無く、定時で仕事を終わらせ、プライベートや家族の時間を大切にしている。休暇取得などの待遇や労働環境も整い、生活がしやすいと思っている。子どもの教育環境も整い、周囲の協力を得ながら、私生活と仕事のバランスを保ちながら両立ができ、就労は継続できている。また、休養のための仮眠室や更衣室は無く、ユニフォームを着用での通勤やリラックスしてコーヒーを飲みながら夜勤者からの業務の引継ぎ、勤務中のブレイクタイムなど、文化の違いに戸惑はあったが、16 年間同じ病院、部署で勤務することは仕事に対する責任感や自信が付き、自己成長につながっていると感じている。

多国籍の看護師と働くことで価値観や文化の違いなどで、意見が合わないこともあるが、異国同士であることで、交流が深まるメリットもある。

【デメリット】と思うことは、多国籍の看護師と交流しながら異文化に触れながら楽しく働けるメリットを感じるが、価値観の違いで、理解してもらえないことがあり、悩むことがある。

現地の看護師に比べ、語学力が弱いため、患者に看護師としてレベルが低くみられていると感じる時がある。デメリットは強く感じる事無く、就労できている。

3) 講話終了後、交流前に記載の質問内容について質疑応答を行った。

Ⅲ. 結果および考察

1. 交流前後の国際看護への関心「有」「無」

国際看護への関心の「有」「無」については表 1 に示すとおりである。関心「有」は交流前 33 名 (53.2%) が交流後は 48 名 (77.4%) に増加した。交流前「無」の 17 名が「有」と変化し、2 名が「有」から「無」に変化した。交流前は関心「無」29 名 (46.8%) だったが、交流後は 14 人 (32.6%) に減少した。

交流前には関心「無」が交流後には、関心「有」が増加したことは、直接的な対話をしながら交流を図れたことで、海外での看護の実際の様子をイメージすることができ、関心が高まったと思われる。

表 1. オンライン交流前後の関心の「有」「無」の変化

N : 62

有無 交流前後	有		無		有		無		有		無	
	学生数	割合	学生数	割合	学生数	割合	学生数	割合	学生数	割合	学生数	割合
交流前	31		12		17	2	33	53.2%	29	46.8%		
交流後	31		12	17	2	48	77.4%	14	32.6%			

2. 交流前後の国際看護への関心「有」「無」の理由

交流前の国際看護への関心「有」の理由は表 2 に示す通り、記述数は 42 で、「日本の看護との違いを知りたい」が記述数 17、「海外の医療ボランティア活動に興味がある」記述数 7 で、将来発展途上国で、看護を必要としている人々を助きたい思いから、派遣メンバーとして活動を望んでいるため、英語を学んでいる学生もいた。また、現時点では海外はイメージがつかないが、海外へは興味・関心がある。異文化に興味があるため、他国籍の人と働いてみたい。インターネット等の情報から、オーストラリアは看護師の評価が高く、給料が高いので、働きたいなどの理由

があげられていた。

交流後の国際看護への関心「有」の理由では、記述数は68で、看護の実際の場면을聴講したことで、記述数が交流前の42から68に増え、交流前の「日本と海外の看護の違いを知りたい」と漠然とした考えが、交流後は「看護の違いを知ることができ労働環境が整い魅力を感じた」と理由の記述内容も具体的になり、表面的な興味・関心から具体的な労働環境まで捉えることができ、看護への関心が深まったと思われる。また、「異文化に興味がある」に関しては、交流後は「異文化に触れ合い多様性を知りたいと思った」と記述数が交流前の7から15に増加した。異文化への関心が単なる興味ではなく、「異文化に触れ合い多様性を知りたい」と変化していた。多様性の共存につながる異文化理解は、異なる文化や価値観を持つ人々と関わって行くために必須であり、看護にも影響すると考える。さらに、海外で就労するには語学力が必要であり、交流前の「英語で仕事ができる事に憧れる」、このことが、実際のスピーチを聴いたことで、憧れを実現させるために「言語の壁があり大変そうだが語学力はつけたい」と前向きな思いに変化したと思われる。実際の生活場面も聴取でき「私生活を大切に生活しやすい環境で楽しそうだった」、「実際の様子を聞き海外への興味がさらに深まった」などがあがっていた。また「海外の医療ボランティア活動に興味がある」と記述の学生はさらに興味が湧き、参加への意欲を示していた。

交流前の「無」の理由の記述については表3に示す通りであり、関心「無」の学生が交流後に減少したこともあり、記述数も39に減少した。その内「海外には興味がない」記述数15、「英語に自信がない・苦手」記述数11があげられ、その他「日本の看護師として働きたい」、「海外は治安が悪く働くのは怖い」、「異文化に触れる機会がなかったので関心がもてない」「海外では

表2. オンライン交流前後の関心の「有」の理由 (複数記述)

オンライン交流「前」の理由	記述数
・日本と海外の看護の違いを知りたい	17
・発展途上国の医療ボランティア活動に興味がある	7
・英語で仕事ができる事に憧れる	6
・海外に興味がある	5
・海外は給料が高いと聞き海外で看護師として働きたい	4
・異文化に興味がある	3
計	42
オンライン交流「後」の理由	記述数
・看護の違いを知ることができ労働環境が整い魅力を感じた	35
・異文化に触れ合い多様性を知りたいと思った	15
・私生活を大切に生活しやすい環境で楽しそうだった	9
・実際の様子を聞き海外への興味がさらに深まった	5
・言語の壁があり大変そうだが語学力はつけたいと思った	3
・海外の医療ボランティア活動へさらに興味が湧き参加したい	1
計	68

日本の看護師免許は使えない」などがあげられていた。

表 3. オンライン交流前後の関心「無」の理由 (複数記述)

オンライン交流「前」の理由	記述数
・海外には興味がない	15
・英語に自信がない・苦手	11
・日本の看護師として働きたい	7
・海外は治安が悪いので働くのは怖い	4
・異文化に触れる機会がなかったので関心が持てない	1
・海外で日本の看護師免許を使えない	1
計	39
オンライン交流「後」の理由	記述数
・英語が話せそうにない・自信がない・英語の発音がすごい	6
・海外には興味がなく行く予定もない	3
・海外で働く必要性を感じない	1
・強い関心がないと続かない	1
計	11

交流後の「無」の理由については、記述数は 11 と減り、未記入者もいた。実際の英語スピーチを聴き、「英語が話せそうにない・自信がない・英語の発音がすごい」が記述数 6 で、英語に対しての苦手意識が高いと思われる。交流前に関心がない学生は交流後も「海外には興味がなく行く予定もない」、「海外で働く必要性を感じない」、「強い関心がないと続かない」の思いの中には、興味、関心がない事に加えて、自分にはできないという否定的な思いもあると推察する。

3. 日本人看護師への質問内容について

交流前に記載させた質問内容は表 4 に示すとおりである。記述数は 103、質問内容は「Q1:日本の医療と看護の違い、看護師の仕事内容、労働環境等について知りたい」が 58.2%と最も高く、就労への関心の高さが現れていた。「Q2: オーストラリアで働くことへの動機を知りたい」「Q3: 英語はどのように身につけどの程度の語学力が必要なのか」がそれぞれ 14.6%であった。また、多国籍の人々と働くことで、「Q4: 日本との文化との違いや宗教に対する対応について知りたい」6.8%、Q5: その他として、「海外で働くために大学生としてすべきこと」「身だしなみについて」「在宅看護について」「給料について」「男子看護師について」等について、少数あがっていた。大学生として何事にも挑戦の気持ちを持つことや男子看護師とも一緒に働いていること、「在宅看護」については、A 氏は直接的には関わっていないが、退院後の在宅移行への橋渡しの役割も担っている。オーストラリアは「在宅で一人で生活できること」が基本方針であり、高齢者医療・介護評価判定サービスや Nurse on call 等のシステム作りが公的に行われているため、地域との連携が円滑であり、保健医療福祉サービスにおける看護の役割が重要になっている。さらに、わが国同様高齢化が進み、高齢者医療・福祉において、1997 年からの「高齢者介護法」が、2024 年「新高齢者介護法」に改正され、2025 年 11 月から、新しい「Support at Home プログラム」

が開始された。高齢者の権利、意思決定を中心に据えて、質の高いケアとサポートが受けられるように体制を整えられた。介護と看護の連携は重要であり、看護師の裁量権の拡大や看護の質の担保のための継続教育、看護師免許更新制度や看護師が高い社会的評価を受けていることは、わが国においても看護の質向上の視点から、オーストラリアから学ぶことが多々あると考える。

学生からの質問に対しては、事前に A 氏に情報提供していたため、講話内容の中に、表 4 に示す Q 1～5 への回答に当てはまる内容の部分が多く含まれていた。また、講話終了後に質疑応答を行ったことで、より具体的な回答が示され、その内容が交流全体を通しての「感想」として自由記述された内容とつながり、国際看護への関心がより深まったと思われる。

表 4 日本人看護師への質問内容 (複数記述)

	質問内容	記述数	割合
Q1	日本の医療と看護の違い、仕事内容、労働環境等について知りたい	60	58.2%
Q2	オーストラリアで働くことへの動機を知りたい	15	14.6%
Q3	英語はどのように身につけ、どの程度の語学力が必要なのか	15	14.6%
Q4	日本の文化との違い、宗教に対する対応について知りたい	7	6.8%
Q5	その他： ・海外で働くために大学生としてすべきこと ・身だしなみについて ・在宅看護について ・給料について等	6	5.8%
	計	103	100%

4. オンライン交流を通しての「感想」について

A 氏の講話後に、質疑応答の時間を設け、内容などの「感想」を自由記述させた。記述内容の類似性から【労働環境の相違】【海外へのイメージの変化】【語学力の重要性】【異文化理解】の4つのカテゴリーが形成された。国際看護への関心「有」の記述内容については表 5、関心「無」の記述内容は表 6 に示す通りである。国際看護への関心「有」の記述数は 171 で【労働環境の相違】について 38%が関心を示し、『タイムマネジメントが徹底し、残業、記録時間が少ない』『休みが取りやすく労働環境が整っている』の記述の中に、《日本は残業が当たり前という認識があるが、時間内に仕事が終わることができていいなと思った》《看護師が残業をしない体制づくりが徹底されている》、『労働形態はバディを組み合わせながら勤務しやすい環境である』では、《日勤の人数が多く、安心して仕事ができる》等、学生は日本の看護の現場での労働環境や業務内容の違いについて捉えていた。労働環境の快適さは、仕事へのやりがいや就労継続につながると考える。また『看護師ができる医療行為が多く業務内容が幅広い』では《ドレーン抜去や抜糸などの医療処置ができて驚いた》《日本では行えない医療行為ができる》など日本の特定看護師制度や認定看護師に興味を示していると思われる。オーストラリアの看護師はほとんどが大学を卒業し、学士号 (Bachelor of Nursing) の取得が必要であり、医療処置など、仕事範囲が広く、日本では医師のみができる仕事の一部が、看護師が行うことが認められている。経験豊富な看護師は医師から意見を求められることも多々あり、責任感のある専門職種として信頼され、社会的評価が高いとされている。また、看護師免許取得の看護師国家試験は無く、看護師免許更新制度であり、更新するためには毎年 CPD (Continuous Professional Development/継続的専門職開

発) という、年間最低 20 時間、看護に関する教育を受け、過去 5 年間の内に 450 時間以上の職歴がなければ更新できないことになっている。多国籍で移民を受け入れることにより、教育の異なる国から来た医療マンパワーの質水準を一定にする努力を行っているのが特徴である。個人が教育の費用負担をして努力をすることを当たり前として職業能力開発を積み上げる形態になっている。そして『新人教育・学生指導など教育が充実』されていることについては、日本と同様に新人教育の専任の教育担当が手厚く教育する体制や医療技術などは病院内トレーニングを受け、クリアすることで実施できることなど、就労後に質の高い看護師育成を目指していることにつなげている。『ユニフォームのまま出勤し身だしなみなどは厳しくない』については、《手術室等勤務以外はユニフォームで出勤し、そのまま帰宅するのは驚いた》《髪の色やアクセサリーの装着は自由なのは驚いた》など、驚きの記述が多かった。感染対策に対する意識や多国籍による人種の肌色や髪色の違いからくる文化の違い、オーストラリア独特の自由さやによるものと思われる。

【 海外へのイメージの変化 】については 29.8% で、『視野が広がり国際看護により興味が湧いた』『日本人看護師の評価の高さを知り自己成長につながった』『他国を知ることによって日本の良さを再認識した』があげられ、A 氏の楽しく就労している様子を目の当たりにしたことが、学生たちの国際看護の視点に対する変化をもたらしたと考える。そして、今回の交流体験を通して、『現地学生との少人数での交流や留学をしてみたい』『海外へ行けないので、また交流会を開催してほしい』などからは《看護学生としての楽しさや辛さを共有したい》《少人数でオンライン交流が質問しやすい》など前向きな記述がみられた。昨今の海外事情や経済状況から、海外への進出は厳しい状況を考えると、国際看護に興味を示す学生を対象に少人数の交流は効果的と考える。

【 語学力の重要性 】については 16.4% で、『英語力は就労の必須条件で高いスキルが求められる』『多言語に対応できるコミュニケーション力が求められる』があげられ、《就労には英語力は必須であり基準に達してなければならない》《現地で英語を学んだ方が上達する》《コミュニケーションをとれなければ医療事故につながる》などあげられ、A 氏のスピーチを聴きながら『海外で就労するために英語をもっと頑張りたいと思った』と意欲的な記述も見られた。

英語力については、看護師として就労するための必須条件であり、英語力の検定試験には TOEIC や TOEFL、日本には英検 (実用英語技能検定) があるが、オーストラリアで広く認知されている英語力検定は IELTS (International English Language Testing System/アイエルツ) とケンブリッジ英語検定があり、就職などでの英語力証明資格である。IELTS は英語力 4 技能 (Listening・Reading・Writing・Speaking) の能力を測る英語力試験で 4 技能各項目が「0~9」のポイントにより英語力レベルを判定する。看護師免許登録用英語力は、IELTS の 4 技能各項目が 7.0 以上 (英検 1 級程度) で、さらに就労経験が就職の可能性を高めると言われている。また、免許更新制度であり、免許更新の第一の目的は「公衆の擁護」(protection of public) であり、医療の実践やケアの提供での質が保たれ、公衆が守られていることであるとしている。例えば、海外から来た看護師が英語を話せずコミュニケーションが取れない場合「公衆の擁護」にならなくなるため、しっかりとした英語力が必要であり、一定の基準を設ける必要がある。今回の交流を通して、《英語を話せるようになり、海外で働きたい》《これからは英語を学んで損はないと思った》《英語を頑張ってお話せるようになりたいと強く思った》と思えたことは、海外で就労するには英語を学ぶことが必須であることへの関心が高まったものと思われる。

【異文化理解】は 15.8%で、『多国籍の国のため文化や価値観に違いがある』『患者は病気について納得するまで質問してくる』では「患者は自分の病気を調べてから病院に行き医師の診断に対して討論する文化がある」「自分が調べたことと別なことを言われたら、突っ込んで質問をたくさんしてくる」「日本では医師に言われたことに従うが、自らインターネットなどで調べ、質問するなど積極的な患者が多いことに驚いた」さらに、「インターネットにもデマの場合もあるため、専門的な知識を持った医師と対等に話し合える点は良い関係で治療ができるのだと分かった」の記述から、医師と患者との関係性に文化の違いを感じ、看護師としても患者と対等に向き合えるような知識を身につける必要性を感じていると思われる。また、『宗教等は尊重し、平等な看護の提供はどこの国でも共通である』では、宗教、食文化、生活文化はそれぞれの患者の状況を尊重し、看護は平等に提供することの大切さを感じ取れていたと考える。

表5 オンライン交流を通しての感想：関心「有」 (複数記述)

カテゴリー	記述内容	記述数	割合
労働環境の相違	タイムマネジメントが徹底し、残業、記録時間が少ない	18	38.0%
	休みが取りやすく労働環境が整っている	15	
	看護師ができる医療行為が多く業務内容が幅広い	9	
	給料面はボーナスは無いが給料が高いのは魅力的である	8	
	ユニフォームのまま出勤し身だしなみなどは厳しくない	8	
	労働形態はバディを組みながら勤務しやすい環境である	4	
	新人教育・学生指導など教育が充実している	3	
海外へのイメージの変化	視野が広がり国際看護により興味が湧いた	29	29.8%
	現地学生との少人数での交流や留学をしてみたい	9	
	日本人看護師の評価の高さを知り自己成長につながった	6	
	他国を知ることで日本の良さを再認識した	5	
	海外へ行けないのでまた交流会を開催してほしい	2	
語学力の重要性	英語力は就労の必須条件で高いスキルが求められる	19	16.4%
	多言語に対応できるコミュニケーション力が求められる	6	
	海外で就労するために英語をもっと頑張りたいと思った	3	
異文化理解	多国籍の国のため文化や価値観に違いがある	11	15.8%
	患者は病気について納得するまで質問してくる	10	
	宗教は尊重し平等な看護の提供はどこの国でも共通である	6	
計		171	100%

国際看護への関心「無」の記述は 57 で【労働環境の相違】については 54.4%であり、関心「有」の記述と類似の内容で、日本の労働環境や業務内容、文化の違いの記述が多かった。

【海外へのイメージの変化】については 19.3%で、『日本の良さを再認識した』では「現地では日本人のイメージが良く患者が安心してくれることがすごく良い事だと思った」「自分は日本の方が性格的にあっているので、日本で看護師として頑張りたい」「海外の自由さより、日本の

きっちりしているところがいい」や『経済力や行動力が無いと海外では生活できない』の記述から、中途半端な気持ちでは海外で就労することは厳しいと感じているものと思われる。「オーストラリアは自由でいいなと興味を持てた」「街はのんびりして、綺麗なところのようなのでいつか行ってみたい」など、好印象の記述がみられた。

【語学力の重要性】については 17.5%で『英語が話せないと仕事も生活もできない』『コミュニケーション力が求められる』では「英語を話せない患者とは紙に書くなど工夫していてコミュニケーションは大切だと思った」「英語を学ぶことが好きでないと看護師どころか海外で生きていけないことを学んだ」の記述から、意思疎通のためのコミュニケーション力や英語力の大切さを痛感したものと思われる。看護を提供するにあたり、異文化理解とコミュニケーション能力を高めるために、患者のニーズに合わせたアプローチが必要である。特に多言語への対応は筆記による図、絵、カード等の活用で、正しい情報の提供が理解の促進となり、患者や看護師の安心とケアの質の向上につながると思われる。言語が異なる場合は、ノンバーバルコミュニケーションの活用も効果的であるため、相手を理解しようとする姿勢や文化の違いなどを理解し、受け入れる関わりが信頼関係構築につながると思う。

【異文化理解】については 8.8%と低いが、記述内容は関心「有」と類似し、「宗教は基本的には尊重している」「宗教で禁止されている食べ物などを把握して対応していることが分かった」「多様な考え方、文化に触れることができるので、楽しそうだった」などの記述から、異文化への理解や気づきにはつながったと思われる。

表 6 オンライン交流を通しての感想：関心「無」 (複数記述)

カテゴリー	記述内容	記述数	割合
労働環境の相違	看護師・学生ができる医療行為が多い	6	54.4%
	タイムマネジメントが徹底し記録の時間が少ない	5	
	日本のようなボーナスは無いが給料は高い	5	
	バディを組む体制で安心感がある	5	
	患者尊重の看護は日本と変わらない	4	
	ユニフォームで出勤するなど身だしなみは緩い	6	
海外へのイメージの変化	日本の良さを再認識した	5	19.3%
	経済力や行動力が無いと海外では生活できない	3	
	海外の自由でのんびりした環境の良さは魅力を感じる	3	
語学力の重要性	英語が話せないと仕事も生活もできない	5	17.5%
	コミュニケーション力が求められる	3	
	英語力をつけるには早い時期からの学ぶ必要がある	2	
異文化理解	食文化・生活文化に違いがある	3	8.8%
	宗教は基本的に尊重しながら関わっている	2	
計		57	100%

IV. おわりに

国際看護への関心や理解を深めるために、オーストラリアで就労の日本人看護師とのオンライン交流の体験を実施したことの効果や課題を明らかにすることができた。今後、看護をグローバルな視点から理解し、国際的感覚を養うための国際看護に関する教育に役立てて行きたい。

1. オンライン実施による効果

- 1) 国際看護の関心への「有」の学生は交流前の興味・関心が交流後はさらに深まったが、「無」の学生は交流後も関心が持てず、日本での就労を強く感じていた。しかし、「感想」の記述からは、関心への「有」「無」に関わらず、単に交流を通しての視野の広がりや文化の違いを感じただけではなく、海外で就労することへの多様性に気づき、物事に対する深い思考や多面的にみるような内容が示され、交流の効果はあった。
- 2) 海外の状況を知ることで、日本の看護の現状を改めて考える機会になる効果もあった。
- 3) 海外で就労することへのイメージが具現化され、発展的な思考への繋がりとなり、自ら学ぼうとする姿勢や将来を見据えて看護師を目指そうとする態度の育成に資する効果があった。

2. 今後の課題

- 1) 現在の不安定な国際状況や経済的な事情、語学に自信がないなどの理由による海外との交流の希薄さを補うために、オンライン交流を継続実施していく必要性が示唆された。
- 2) 国際看護への学びが深められるようになることと語学力向上のために、学生からの意見にも挙げられていた現地の看護学生との交流ができるような機会を検討していく必要がある。
- 3) 語学力が強化できるように、自らの学習に加え、大学内での講義やボランティア活動等への参加を促していく必要がある。

【引用・参考文献】

1. 張 暁春, 田代麻里江, 2013 年度国際看護学演習におけるオーストラリア海外研修報告, 梅花女子大学看護学部紀要, 第 5 号 (2015 年 3 月 20 日刊) 抜刷
2. 田代麻里江, 張 暁春, 2014 年度国際看護学演習におけるオーストラリア海外研修報告, 梅花女子大学オリジナル海外研修プログラム企画の試み, 梅花女子大学看護学部紀要, 第 5 号 (2015 年 3 月 20 日刊) 抜刷
3. 高橋 亮他, 看護学科 1 回生に開講した「国際看護学」の効果に関する検討, 佛教大学保健医療技術学部論集, 第 9 号, 2015
4. 網野實子, 看護師労働力政策と看護師免許更新制度, 一ワシントン DC とオーストラリアの免許更新制度分析一, 明星大学通信制大学院博士後期課程論文, 2013
5. 中越利佳他, わが国の基礎看護教育における国際看護教育の現状と課題, 愛知県立医療技術大学紀要, 第 11 巻, 第 1 号抜粋, 2014
6. 西川まり子, 横山ハツミ, 国際看護研修から見る異文化看護への挑戦ーオーストラリア編ー, 広島国際大学看護学ジャーナル第 8 巻第 1 号 2010
7. 河内優子, グローバル経済時代における看護労働の国際化, 九州国際大学経営経済論集, 第 14

巻第 1 号, 2009

8. 西川まり子, 横山ハツミ, 国際看護研修から視る異文化看護への挑戦ーオーストラリア編
広島国際大学看護学ジャーナル, 第 8 巻, 第 1 号, 2010
9. 久保宜子, 山野内靖子, 蛭田由美, 文献から考察する基礎看護教育における国際看護学教育の
現状, 八戸学院大学紀要第 42 号, 2016
10. 山野内靖子, 久保宜子, 蛭田由美, 東北 A 県県南地域における国際看護学の教育プログラムの開
発に関する研究ー高校生の海外への関心と国際的な活動に関する意識調査ー,
八戸学院大学紀要第 58 号, 2019
11. 久保宜子, 楊麗栄, 柴垣博考, 中国の大学とオンライン交流会を経験した学生の学びの成果
ーテキストマイニングによる分析ー, 八戸学院大学紀要第 68 号, 2024
12. 近藤麻理, 国際看護ー知って考えて実践するー第 3 版, 医学書院, 2026. 1
13. 浦田喜久子編集, 災害看護学・国際看護学-看護の統合と実践-, 医学書院, 2015
14. 樋口まち子編集, 国際看護学-看護の統合と実践-第 5 版, メジカルフレンド社, 2025
15. 日本の正看護師資格からオーストラリア正看護師資格へ
<https://www.aswho.com/transfer-registered-nurse> (2026. 1. 20 アクセス)
16. 留学ジャーナル: オーストラリア留学
<https://www.ryugaku.co.jp/country/AU/> (2026. 1. 20 アクセス)
17. オーストラリア留学センター (2026. 1. 20 アクセス)
<https://www.wavenetwork.com.au>
18. オーストラリア政府新高齢者介護保険法
<https://www.anmf.org.au/media/rixjepl5/nursing-and-midwifery-workforce-overview.pdf> (2025. 12. 20 アクセス)
19. オーストラリアの高齢者介護制度の改善
<https://www.myagedcare.gov.au/types-care> (2025. 6. 25 アクセス)